〈二〇二〇年の大学入試問題に挑戦してみよう〉

〈出題校〉東北学院大学

日本人にとって、ことばの実体は文字なのである。音声は、それがおとすかげにすぎない。かげであるから、あちらのことばのおとすかげと、こちらのことばがおとすかげとがかさなっても気にしないのである。かげがかさなった時は、チラリとその実体のほうを見れば区別がつく。チラリとその実体を見る——それがすなわち文字の参照なのである。参照、と言ったって、無論いちいち辞書をひくんじゃないよ。上に言ったように、頭のなかで瞬間的にやるのだ。

「第一志望のコーコーに一発ではいってくれました」チラリと「高校」。「ほんとに親コーコーな子です」チラリと「孝行」。決してとりちがえたりうろたえたりすることはない。いやそもそも、それを言う者も聞く者も、ここに「コーコー」という音(おん)が二度あらわれたことに気づいていない。「コーコー」は「高校」「孝行」を呼び出すための瞬間的媒介にすぎず、文字が呼び出されたとたんに音はもう忘れられている。

言語学の教えをまつまでもなく、本来、ことばとは人が口に発し耳で聞くものである。すなわち、言語の実体は音声である。しかるに日本語においては、文字が言語の実体であり、耳がとらえた音声をいずれかの文字に結びつけないと意味が確定しない——コーコーという音は「高校」あるいは「孝行」という文字に結びつけてはじめて意味が確定する——のであるから、日本語は「顚倒(てん)した言語」であると言わねばならない。

世界数千種の言語のなかで、日本語は比較的やさしい言語か、むずかしいほうか、また、ごくふつうの言語か特殊な言語か、ということがよく言われる。この「顚倒した言語」であるという点では、たしかに特殊な言語であろうと思う。

無論、ずっとそうであったのではない。江戸時代の人たちが、「バントさん」「ゴシンゾさん」あるいは「ゴフク屋」「デッチボーコー」などと言う時、それが「番頭」「御新造」「ゴフク」「丁稚(でっち)ボーコー」などの文字を参照しなければ意味が確定しないものであったはずがない。顚倒した言語になったのは明治以後である。

言うまでもなく、文字がことばの実体であるというのは、日本語のなかの字音語についてのことである。ただ、明治以後の日本では、社会のあらゆる方面が西洋化し、主要なことばはほとんどこれらの字音語がしめることになったために、顚倒がつねにあらわれることになったのである。

そして、何より重要なことは、日本人がそのことをすこしも意識していない、ということだ。だから、明治以後の日本人の言語生活のなかで漢字がどんなに重要な役割をはたしているかにも気づかない。政府や知識人がくりかえし漢字のサクゲン、ないしゼンパイを主張してきたのもそのゆえである。いかに重要な役割をはたしているかに気づいていないから、「こんな時代おくれのものはなくしてしまいましょう。」と気軽に言えるわけだ。

問1 ——線部a～dのカタカナを漢字に直せ。

a＝　　b＝

c＝　　d＝

問2 ——線部①の「まつまでもない」の意味として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 欠かすことができない　イ 当てにならない
ウ 頼る必要がない　エ 十分ではない
オ 見込みがない

問3 ——線部②とあるが、ここではどのような意味か。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 転がった　イ ひっくり返った　ウ 壊れた
エ 堕落した　オ 遅れた

問4 ——線部③と最も近い意味の語句を次から選び、記号を○で囲め。

ア 絶対的　イ 相対的　ウ 圧倒的
エ 対照的　オ 相関的

問5 次の各文のカタカナ部分を漢字に直せ。

・息子のことはカテイ問題であるし、「生活環境が違えば」というカテイの問題にはお答えできません。

・法が規定する損害のホショウは、ホショウ人の義務としてきっちりと履行いたします。

1＝　　2＝

3＝　　4＝

問6 次の□にそれぞれ漢字一字を入れて、四字熟語を完成させよ。

大言□語（実力以上に大きなことを言うこと）

社交辞□（世間づきあいを円滑にするほめことば）

□言飛語（根拠のないうわさ話）

筆者紹介

高島俊男（たかしま　としお）

一九三七(昭12)年～。兵庫県生まれ。中国文学者。東京大学経済学部を卒業して銀行に勤めた後、同大学院で中国文学を研究した。『お言葉ですが…』シリーズ、『本が好き、悪口言うのはもっと好き』などがあるほか、ブログ「お言葉ですが…最新版」にも書評を掲載している。